学生相談室だより55

カウンセラー　奥野　光

先日、日本で生活している北欧出身の女性と話をしていたら、日本人は何でも包装しすぎで環境に悪い、という話題になりました。日本は豊かな国なのだから、やろうと思えば何でもできるはずなのに残念だ、と言うのです。私はその意見に同感するものの、自分がいざ物をあげるとなると、それなりにきれいに包みたい、せめて袋に入れて渡したい、などと思ってしまうわけです。これは私にとって環境への良し悪しだけでは語りきれないことでした。結局話は、包むという文化や、包み方に反映される人間関係や人柄にまで及んで盛り上がり、「やっぱり私は日本人だなぁ」とあらためて感じさせられることになりました。

異なる文化に身をおいたり、異なる背景をもつ人と接するとき、それをどちらか一方の「間違い」ではなく双方の「違い」として経験してみると、相手への理解につながるだけでなく、自分の考えや価値観、自分らしさがはっきりと現れてきます。似たもの同士だと思っている友達でさえ、そう決めつけないでつきあってみると、実はいろいろな違いがあることに気づかされるものです。

大学時代は、自分らしさを確立していく時期だと言われています。それは様々な人や社会と自分が結びつくところでの経験を通して実現していきます。「同じ」という安心感や心地よさに浸かりすぎず、「違い」にも開かれてみてはどうでしょうか。その経験は、自分らしさを発見し、卒業後にはさらに多様な人々の集まりである社会で生きていく学生の皆さんたちの人生に様々な貢献をするのではないでしょうか。

普段の気の合う者同士の関係を見つめなおすもよし、違和感を覚えるほどの人との会話に乗り出すもよし、違うことの面白さもぜひ存分に味わってほしいものです。所詮は皆同じ人間同士なのですから。